

第5学年 国語科学習指導案

1 単元名 人間の生き方をえがいた作品を読み、対談や読書会をしよう

「マザー・テレサ」(東京書籍5年下)他伝記

2 単元観

本単元は、「対談」「読書会」等を通して、伝記教材文を「読むこと」の力を付けるために設定した。「マザー・テレサ」や他の伝記を読み「対談や読書会をしよう」という活動を児童の目標にしながらも、教師は文章の叙述に即して、人物の生き方や考え方を読み取らせ、さまざまな人物の魅力について話し合わせる。また、自分の将来の夢や生き方についても考えさせるように働き掛けをしていく。

(1) 児童観

本学級の児童は、全体的に本を読むことを好んでおり、朝の「読書タイム」では15分間という短い時間だが、集中して読書をしている。読書傾向を見てみると、学校の怪談や怪談レストランシリーズなどの怖い話系、ダレンシャンシリーズなどファンタジー系、ギネスの本、光とともになど実話を描いた作品等が人気が高い。伝記についてはほとんどの児童が読んだ経験はあるが、内容については、詳しく覚えていない児童も多く、今は好んで読む傾向にない。伝記に魅力を感じていないと思われる。

1学期に学習した説明文教材「動物の体」では、対談を取り入れ読み進めていき、動物についてブックトークを行った。動物関連(ノンフィクション作品)の本を100冊ほど学級におくことで、意欲的に読み進めることができた。しかし、説明文「森林のおくりもの」においては、本文には6つの問題提示があり、本論の始まりはどこからなのか根拠をもとに意見を出し合わせてみたが、なんとなく段落分けをする子が多く、根拠を基に意見を出し合う児童が少なく、文章に着目し、書かれた言葉から着実に読み取っていく力が必要だと考える。

(2) 教材観

主教材「マザー・テレサ」は伝記文学である。ややもすると、伝記は、偉大な人物の業績を取り上げ、自己と比較し、生い立ちがあまりにも裕福であったり、悲惨であったり、自分とかけ離れた描かれ方をしていると自己と重ねての主体的な読みが難しい。その点、この教材で描かれているマザー・テレサは、はじめはどこにでもあるような一般的な幸せの家庭の子であり、児童が身近に感じることができる。

また、作品の構成としては、テレサが行った取り組みを3つにしばって取り上げられており、全場面にテレサの心の中を表す言葉も書かれている。それに、人物の人柄や業績がとらえやすく、エピソードや演説の一部も入っている。テレサの言動からは、やさしさ、公平さ、意志の強さ、行動力など児童それぞれに様々な人間の魅力を感じとるであろう。このような事実に基づいた伝記を読むことは、児童にとって分かりやすく、人物の生き方や考え方について学ぶには適した教材である。

(3) 指導観

指導にあたっては、教科書教材「マザー・テレサ」を単元の学び方の礎ととらえ、副教材である他伝記を讀みの視点をもちて学習させていく。比べ読みをしながら、教科書教材の読みを深めたり、その子なりの人物像に迫れたりすると考える。

単元の導入にあたっては、心ひかれる人物を、これまでの読書活動や他教科・領域での学習、テレビや新聞、生活体験をもとに出させることで、人物について学習することをイメージさせたい。また、「人間の生き方をえがいた作品を読み、読書会をひらこう」と学習のゴールを知り見通すことで意欲を高めさせたい。

主教材文「マザー・テレサ」を読み取っていく段階では、「対談」を取り入れて活動させる。対談は児童全員が2人だったり、グループでしたりすることで、友達任せではない自分の読みを考えさせる手立てにもなる。また、「テレサになりきっての対談」(対談)「読者の立場からの対談」(対談)活動を取り入れることで、讀みの視点を広げさせたい。

他の伝記(「洪庵のたいまつ」「レイチェル・カーソン」「ヘレン・ケラー」)を読む段階では、主教材文で学習したことを生かして、人物の生き方や考え方を視点に沿って調べ、グループごとに「生き方新